



# News Letter



白百合女子大学 発達臨床センター

Shirayuri College Clinical Center For Developmental Disorders

2023.12  
vol.14

## 『ニュー・シネマパラダイス』—トトと出会う—

木部 則雄



『ニュー・シネマパラダイス』という映画をご存じの人は多いと思う。これは1988年に公開されたイタリア映画であり、20世紀の屈指の名作である。あらすじを端的に述べるが、これはローマ在住の映画監督・サルヴァトーレの回想録である。ここには3人のトトが登場し、それぞれ子ども、青年期、成人と3人の配役によって演じられている。第二次世界大戦終結から間もない頃、トトという愛称のサルヴァトーレ少年は、シチリア島の山村で、母と妹と暮らしていた。この時、映像技師アルフレードと知り合う。トトは映画に夢中になり、アルフレードの仕事を見様見まねで体得してしまう。この二人のやり取りはとてつもなく絶妙である。この映画館が火事になり、アルフレードは火傷で失明してしまう。この映画館は再建され、これが「ニュー・シネマパラダイス」である。トトは青年期になり、ここで映像技師として家計を助け、エレナという女性と恋に落ちる。その後、戦争に行き、エレナと別れ別れになる。最後に、成人となって映画監督として成功した。

この映画を発達心理学的に考えると、3人のトトはそれぞれ発達課題に直面し、それを果敢に乗り越えている。子どものトトは父の死、当時の暗い世相にめげることなく、まっすぐに自分の認知愛、好奇心を発揮しながら、澁漣と子ども時代を過ごす。青年期のトトは家計を支えながら、熱烈な恋愛関係を築く。トトは戦場に赴き、帰省するが、エレナは消息不明となる。トトは悲嘆に暮れ、幼い頃から父親以上の関係にあったアルフレードは、トトの才能を見抜き、二度とシチリアの地を踏むことなく、ローマに行くように命じる。これは青年期のミッションであり、失恋の失意のうちトトは飛び立った。映画の冒頭は、トトの母親が残した伝言、アルフレードが亡くなり葬儀の連絡だった。トトは30年ぶりに

故郷の地を踏み、過去を振り返る。これは中高年のテーマである人生の統合である。この映画が見事なのは、こうした発達のテーマが天音なく明晰に描かれているからである。

こうしたあらましであるが、映画の最大の魅力は子ども時代のトトの名演であろう。トトは元々役者ではなく、ロケ地であるパラッツォ・アドリアーノの小学校に通う生徒だった。そこで選ばれた子役のトトは、まさに理想的な無垢な子どものエネルギーを観客に与えてくれる。私たちはトトに自分の子ども時代を重ねて想起し、或いはこんな子どもへの憧れを抱く。私たちはこのトトに出会い、そこに感動が生まれ、清々しい気持ちになる。これがこの映画の大きな魅力であろう。

さて、これは蛇足の類と言うか、夢から一気に覚まさせる話である。アルフレードはシチリアからローマに旅立つトトに「人生はお前が観た映画とは違う、もっと困難なものだ!」と語る。トトは幾多の困難に出会いながら、これを克服して、名監督になった。

今夏、このシチリアのロケ地、パラッツォ・アドリアーノを訪れた。この村は人口3000人足らずの村であり、この映画の製作にすべての村民が関わったそうだ。この時、偶々コロナ明けの映画祭が開催される直前だった。私はここで、40代半ばの実物のトトに出会った。トトは遺伝性の眼疾患のために、20代から視力を失い、現在は完全盲となっていた。村のガイドさんが語るには、この数年はかなり落ち込んでいたという。しかし、トトはイタリア人らしく明るく振舞ってくれた。この映画でアルフレードは失明するが、悲惨な人生の巡りあわせである。そして、人生は困難なものだというアルフレードの台詞以上に、人生の困難さを目の当たりにした。トトがもう一度、飛び立ってくれることを信じ、これから人生を謳歌してほしい。



# 赤ちゃんのための心理的ケア

## Watch Me Play! アプローチの紹介

御園生 直美

### 1) 不適切な養育を受けた乳幼児

乳幼児期に虐待やネグレクトなどを体験し、養育者の喪失や、分離を経験した子どもたちは、人生の早期からトラウマ体験を重ねていることがあります。他者に十分に理解されたり、情緒的な関わりを受ける経験が少ないため、こうした子どもたちは適切な場所に保護された後も、大人が反応してくれるということを予測できず、ほとんどサインを出さないということも少なくありません。そのため長時間眠り続けていたり、働きかけに反応しなかったりするため「おとなしい赤ちゃん」と誤解され、適切な支援を受けられないまま見過ごされてしまうケースもあります。しかしながら、言語化以前のそのようなトラウマ体験は、身体的な記憶として刻まれ、保育園や幼稚園、小学校に上がる頃に問題行動という形で、ようやく心理的な支援が入るといった現状があります。

乳幼児期にトラウマ的な体験をうけたのならば、問題行動といわれる状況で子どもが苦しむ前に、赤ちゃんたちに何か対応することができないか、ということで、英国で開発されたのが、今回ご紹介する Watch Me Play! という遊びを使ったプログラムです。

### 2) Watch Me Play! プログラムとは何か?

このプログラムは、ボウルビーのアタッチメント(愛着)研究で知られる英国の The Tavistock & Portman NHS で、里親養育をうける乳幼児のために開発された遊びを通したアプローチです。(日本では、残念ながら先進国では既にほぼ行われていない施設での集団養育である乳児院が主流ですが、国は今後、3歳以下の乳幼児の委託先を里親養育に変更していくことを決定し変化の舵を切っています。)

社会的な養護を受けている乳幼児は、感情の表出や理解の場としての遊びに問題を抱えてしまう場合も多く、

なかには強い恐怖感から、全く遊べないということもめずらしくありません。

そこで、Watch Me Play! では、子どもの自発的な行動ができるような安全な環境を用意することに加えて、子どもの行動や情緒的な体験に注目して、大人が教えたり、質問したりして遊びを中断させることなく、子ども主導の自由な遊びを促すことを目的に作られました。実際の Watch Me Play! の実践は非常にシンプルなもので、子ども主導の遊びについては、他の多くのペアレンティングのプログラムの内容に含まれているものと、あまり違いはありません。しかし Watch Me Play! では、子ども主導の遊びの項目にのみ特化しており、マニュアルを読んだだけで誰でも簡単にプログラムが行えるようにできています。特に実際に日々の生活で子どもに最も近い養育者が気軽にできるように柔軟な枠組みになっており、現在、イギリスでは Watch Me Play! プログラムは里親だけでなく、障害を持った子どもを育てているご家庭、学校、また一般の子育て家庭などでも広がり、適応範囲も8歳まで拡大しています。イギリスは国民保健サービスが無料であることから、マニュアルや実施も無料で、検索するとマニュアルは誰でも読むことができます。(日本語版マニュアルを訳しましたので、Watch Me Play! マニュアルと検索すると読むことができます。)

### 3) 個別の注目を得ることの重要性

Watch Me Play! は週に2回以上、できれば1回20分ほどの実施が推奨されており、中身は子どもの主導の遊びに大人がついていくものです(図1)。Watch Me Play! の遊びの中で子どもたちは、自分の行動に合わせて養育者が反応してくれること、また養育者がどこにも行かず自分だけをみていてくれるという安心感を体験します。必ず自分だけの時間が確保されているという体験は、



図1 Watch Me Play! の内容

それまで養育者の動向に常に注意を払ったり、大人の注目をとどめるためのしがみつき行動などをしてきた子どもたちに変化をもたらします。ネグレクトで人生の初めから養育者からの十分な注目をもらえる体験が著しく不足している子どもたちも、少しずつ Watch Me Play! の体験をおして養育者への信頼を高め、反応や探索行動が増えるようになります。

特に子どもの年齢が小さければ小さいほど Watch Me Play! の効果への反応も早く、2週間ほどで喃語や発話などが増えていくケースもあります。アタッチメント(愛着)対象への反応の増加や、自然と自ら遊ぶ探索行動の増加は、その後の対人関係の発達や、認知発達に大きな影響を与えられと考えられます。

混沌で変化の多い環境などから移動してきた子どもにとっては、こうした定期的な遊びの時間が一貫した構造をもって維持され、繰り返される中で、はじめて安心して自分の遊びに没頭することが可能になります。また Watch Me Play! のなかで大人から状況にあった行動や感情の意味を言葉で伝えてもらう機会をもつことで、遊びを通しての感情調整なども促進されやすくなります。その結果、集中力や記憶の保持、感情の理解や役割取得など遊びを通したさまざまなスキルの獲得ができるというメリットもあります。

他方、養育者は Watch Me Play! を行う中で、短い時間でも、十分に子どもの世界を共有することで、子どもの喜び、楽しみ、怒り、恐怖、不安などの内的な状態について理解できるようになります。また、Watch Me Play! では支援者が定期的に家庭に訪問して実際の遊びに一

緒に参加することも行います。訪問の際は、遊びの後に、支援者が養育者と一緒に遊びの振り返りを行うことで子どもの遊びや、それにとまなう養育者の気持ちにも寄り添います。

定期的な支援者とのふりかえりがあることで、子育ての中での発見や喜び、変化を実感したり、葛藤や不安、心配などを支援者と話し合うことができるようになります。いろいろなことを一緒に考える機会があることで、衣食住のケアだけでは見えてこなかった子どものトラウマや、発達の問題に対して、早期からの介入や連携を行うことも可能になります。

特に困難を抱えやすい虐待やネグレクトを受けた子どもの養育では、子どもの体験した恐怖や不安を取り込んでしまう二次的トラウマの症状から養育者が心身の不調を訴えるようになることも多いといわれています。そうした二次的トラウマへの予防や、子どもの状態に合わせた助言なども定期的に行うことが可能になることは大きなメリットです。

問題が深刻化する前に家庭の中でアプローチができることで、養育者や子どもに何が起きているのか、また子どもの行動や養育者自身の反応の理解を深めることで、早期にさまざまな問題への予防や対処ができることは子育てでの孤独感や育児の負担感を減らすことにつながり、里親委託の中断の防止になっています。こうした育児環境が整うことは、結果的に子どもにも安定した養育の提供を保障することになります。

Watch Me Play! は里親家庭だけでなく、誰でも行うことができますので、もし興味があるかたは、ぜひ日本語版のマニュアルをご覧くださいと嬉しいです。

### もっと知りたい方へ

ジェニファーウェイクリン(著) 御園生直美、岩崎美奈子  
(監訳)『里親養育における乳幼児の理解と支援：  
乳幼児観察から「ウォッチ・ミー・プレイ!」の実  
践へ』, 誠心書房, 2023

私たち臨床心理士・公認心理師はここに携わる専門職として資格を取得しています。私は現在、総合病院の小児科で、医師、看護師、助産師と一緒に仕事をしています。総合病院という主に身体、フィジカルを扱う仕事の中で心理、精神を扱う専門職とはどのような働きをするのでしょうか。「精神は肉体に宿る」と言いますが、肉体は目に見えています。しかし、精神、こころは目に見えないのです。切っても開いても、叩いても押しても実態は確かな形として現われてきません。心理士／師は薬を処方することも注射をすることもできません。医療の現場にいて無力だと思ふことがよくあります。医師、看護師、助産師と協働している中で心理士／師であることの意義、専門性とは何なのでしょう。

心を育てる、心に寄り添う、心を使うなどと言葉でいうのは簡単ですが、どのようにこの作業に当たればいいのか。心理士／師が患者さんのこころにアプローチしていく時に使えるもの、それは聴診器でも薬でもなく、最終的には自分の「こころ」と言えるのではないのでしょうか。

精神分析のトレーニングの一つに「乳幼児観察」があります。生後間もなくから週1回、目の前の親子、家族を2年間に渡って観察します。呼吸や手の動き、体の向き、覚醒の度合い、表情、声のトーンなどに着目して観察し、

自分の中に渦巻く情緒も吟味し、注意を払いながら、眼も耳もフル活動でこころへの接触を試みます。こうあってほしい、こうあるべきといった社会的規範は横において、いま目の前にいる子ども、親について感じ、考える、こうした営みが心理士／師の「こころ」を作り、成長させていくのだと思います。

子どもや家族に何が起きているのか、どのような気持ちでいるのかを言葉、表情、動き、視線などを観察し(Watch)、対峙している心理士／師自身の心の中に起きる気持ちにも焦点化しながら(Wait)、いろいろ思いを巡らせ(Wonder)、適切な言葉で言語化してその可能性を伝える(Word)。乳幼児観察の視点から数年前に作成した「おかあさんのきもち、子どものきもち：きもちに寄り添う子育て」が当発達臨床センターのHPに掲載されています。是非ご覧になって、この中にある「4つのW」を参考にさせていただき。

こころを使って患者さんにアプローチし、子どもと家族のこころの理解を深める。医師、看護師、助産師と理解を共にしていく。こうした営みが医療現場での心理士／師の専門性だと感じ、やりがいにつながっています。

(村田 朱美)

*Staff Member*  
2023年度 発達臨床センター 臨床スタッフ

		月	火	水	木	金
専任教員	木部 則雄	午後				
	波多江洋介					午後
	涌井 恵	午後				午後
	御園生直美					午後
	豊村かなみ	終日		終日	終日	終日
非常勤講師 兼 研究員	池上 雅子	午後				午後
	貝塚 陽子	午後				午後
	加藤 慎吾	午後				午後
	柳井 康子	午後				午後
非常勤講師	村田 朱美	午後				

		月	火	水	木	金
事務職員	小椋 麻子	終日	終日		終日	終日
	笹森 倫代			終日	終日	
	松本 伸子	終日	終日	終日		終日
研究員	紺野 道子		午後			
	櫻井 千夏	午後				
	太田百合子	適宜				
	杉沢 智子	適宜				
	中石 康江	適宜				

<顧問> 森永良子、宮尾益知、緒方千加子、五十嵐一枝、秋元有子、秦野悦子

<研修生> 原山郁花、鈴木歌音、菅野百花、長田麻里

*Editorial Note*  
編集後記

今回のNews Letterは、2023年度より発達臨床センターのスタッフとしてご尽力いただいている先生方に「特集」と「Topics」のご執筆をしていただきました。引き続き

き、発達臨床センターが、心理臨床の専門機関として多くの方に安心してご活用していただける場となるよう、真摯に活動していきたいと思っております。(豊村かなみ)